



あたしは落ちる。

落ちている。踊りだした途端に足を滑らせたから。冷えた夜の空気があたしの額とむき出しの頭皮を押して、風みたいだ。その流動する空気があたしから汗を奪う。奪われた。奪われた汗は町の空に散って、煌けばいいのに。そう、思う。

あたしはあたしの名前を呼ばない。でも、はじめは呼ぶ。

こなつ、とそう呼ぶ。

こなつ、さよならが、爆発するんだよ、と言う。

始まる前から終わってしまったみたいなの女の子。はじめは踊りだした途端に足を滑らせたあたしに駆け寄り、笑いかける。その時、あたしはまだ女の子の形をしていて、そして、女の子だ。本物だ。

今は違う。今は、本物じゃない。違う形をしている。

今、あたしは痩せこけている。痩せこけて、白い衣に包まれている。病院で着る服。あたしの体は乾いているから、服には皮膚の欠片がたくさん付着している。黄色くて、少しだけ変なおいがする。あたしの古い皮膚と病院の薬のおいが合わさっている。

虫が止まる。

落下するあたしの胸の上に虫が止まる。病気をばら撒いている、害虫だ。白く半透明で、透けて見える。駆除の対象になっている。そういえば、もうすぐ駆除の時間だ。薬が散布される。街の上空から。人間には害がなくて、虫だけを殺す薬。かわいそうだが、病気をばら撒いているのだから仕方がない。虫は、だいたい夜が深く沈みはじめる頃合いに発生する。大量に発生するので、空は覆い尽くされる。そして、大量に死んで、落ちてくる。大量に落ちて、街に降り注ぐ。それは時折月の光を反射して、光る。

はじめも、死ぬ。

死んだ。

はじめは少女のまま死んだ。もうとうに燃え尽きて、埋められている。あたしはお通夜に行った。同級生は誰も来ていなかった。家族はおばあさんだけだった。おばあさんは泣いていて、その一年後に死んだ。事故だった。交差点で赤信号を渡ろうとして、跳ね飛ばされた。飛ばされたおばあさんは近くのカフェに突っ込んで、ガラスを辺りにばら撒いた。そのガラスの破片で多くの人たちが軽傷を負った。

はじめは、教室にいた。教室のど真ん中の席で、小さな本を開いていた。そのときにはもう本は変わり者の慰み物でしかなかったから、あたしはあたし以外に本を読む人間を初めて見た。はじめの周りには誰も人がいなかった。よく見ると、その本はあたしの子の本棚にあった本と同じ本だった。それに気づき、あたしははじめに話しかけた。

「ねえ、それ、その本、知ってる」

「ああ、そうだね。あたしも知ってる」

あ那时的めんどくさそうなはじめの表情を、あたしは思い出す。はじめはそれからずっと、めんどくさそうな表情をしていた。めんどくさそうで、甘い表情だ。真っ青な夜に浮く雲みたいに甘い表情だ。あたしはその表情を何度も何度も思い出す。それは、落ちる、今このときにも。浮かんで、消えずに浮かび続ける。

あたしは小説を書く。

女の子のほうのあたしだ。少女ではないほうのあたしは書かない。読む。あたしははじめと出会い、小説を書くようになった。つまらないね、とはじめが言って、あたしもそう思った。あたしは主につまらない小説を書いた。書き続けた。

「どうしたの？」とはじめはあるとき言う。あたしはでも、うまく答えられない。じぶんでもよく理解していない。でも、書いて、自分が何をかいているのかよく分からなくなってきて、でも、書く。書き続けて、書き散らす。

あたしは時折、あたしの原稿を引きちぎる。あまりのつまらなさに怒りの表情を浮かべながら。白い紙はひらひらと落ちる。そのとき風が吹いて、あたしたちは学校の屋上にいて、太陽の光があたしたちの肌を焼いて、ひどい、とあたしは思うけど、紙切れになった小説はどこかに舞い上がって飛んでいって、あたしは飛んでいかなかった紙切れを拾い上げるけど、仕方がなかった。あたしの小説はつまらなかった。

「でも、つまらないものにだって存在する意味はあるんじゃない？」

はじめはそう言う。

でも、そんなことはどうだっていい。

雨が降る。空気が白くにごって、歩くあたしの顔に白い粒が触れる。うわっ、とはじめが言って、手を振り回す。目を凝らすと白い粒は虫で、ふわふわと浮いている。たくさん浮いている。公園のわき道だ。坂道の上だ。そして、またあたしの頬に触れるものがあって、それが、雨だ。朝の予報で降ると言っていたのにあたしたちは傘を忘れていて、走る。一粒ずつ、様子を伺うように落ちていた雨粒は徐々に気遣いを忘れる。笑う。ほこりのようなにおいがする。

逆？

ほこりのようなにおいがして、それで、雨？ううん、やはり逆ではない気がする。あたしは忘れっぽいんだけど、そう思う。

ねえ？

「なに？」

ねえ。はじめが死んでしまった日も、雨が降っていた気がする。そうだ。ふわふわと虫が浮いて、大きな粒の雨が降る。朝だ。あたしははじめが死に絶えるその瞬間、傍らに座り込んでいる。死にかけたはじめは乾きに乾いて、ほこりみたいなにおいがする。

「なに？」とあたしは言う。はじめの口が少しだけ開いて、息が漏れている。

「さよならだ」と、はじめは言う。

あたしは窓の外を見る。海みたいな薄青い空が見える。雨が降っている。海が落ちているのだ、と思う。見下ろすと、子供たちが見える。みな、青いかさを差している。みな、走りながら笑っている。笑い声が、雨粒の隙間をぬう。

「雨の日でも」と、あたしは言う。

「雨の日でも、子供たちは笑うね」

「こなつ」と、はじめが言う。

「さよならが、爆発するんだよ」

「血管の中で」

「神経の中で」

「爆発するんだよ」

それで最後。終わり。はじめは焼き尽くされて、土の下に埋められる。

あたしは、それから本を読んだ。はじめのおばあちゃんがくれた。はじめの部屋にあった本だった。元々ははじめのおばあちゃんのお母さんのものだったらしいけど、もう要らないから、とはじめのおばあちゃんがくれた。はじめのおばあちゃんはもう細かい文字をうまく読むことが出来ない。貰った本はその殆どが日に焼けて黄色くなっていた。ある本はめくるだけで千切れて、ある本はインクがかすれていた。でも、読んだ。時折、虫が這い出た。銀色の虫だった。つぶすと銀色の腸が漏れた。でも、読んだ。文字を追った。文字は、残りかすみみたいだと思った。誰かが考えたこと、思ったことの残りかすだ。そして這いずる虫みたいだ。あたしはそこに、はじめが残っているのだと思った。目の前で這いずる文字は、かつて、はじめの眼球にうつった文字だと思った。はじめの眼球の裏側で、その文字が這いずったのだと思った。目の前の文字の向こう側には、はじめがいるのだと思った。

だから、あたしは、本を読んだ。読み続けた。部屋にこもって読み続けていると、知らず時間が経った。何時間が経って、そのうち日もまたいだ。母親は悲しみ、哀れみ、そして怒った。あたしは痩せて、積み上げられた本はやがて雪崩れた。いくら読んでもなくならなかった。

「ねえ、こなつ」とはじめはかばんを放り投げる。

「こうやって、かばんは落ちるよね」

放り投げられた紺色のかばんはなだらかな弧を描いて落ちる。あたしたちは公園のブランコに腰掛けて揺れている。

「うん。落ちるね」

「葉っぱも、落ちる」と、はじめはブランコをこぎながら地面に積もる落ち葉を蹴上げる。

「うん」

「舞い上がって、落ちる」

落ちた葉はゆっくりと上昇する。はじめが揺れる速度よりは遅く、あたしが揺れる速度よりは速く。あたしは前後に揺れて、葉っぱが近づいて、遠くなる。はじめの揺れる速度はどんどん速くなっていく。夜が地の端からゆっくりと這い出てきて、空を覆い隠そうとしている。葉が落ちる。地面に触れる。灰色の雲がまだらに浮いていて、はじめの揺れる速度とふり幅はどんどん大きくなってゆく。

「あたしも」

はじめは言う。

飛ぶ。

はじめが座っていたはずのブランコにはその姿はない。浮いているから。放り投げられて、スカートが翻って、下着が覗く。青い下着。はじめはきれいな弧を描いて、ブランコの柵を飛び越えて、落ちる。柵の向こうには茂みがある。草の名前は判らないけど、たくさん生えている。その植物が、折れる、雨音のような音がして、はじめが植物に埋まる。あたしはその間、揺れて、揺れる。

「落ちるよ、こなつ。」

「でも、空は落ちない。雨は落ちるのに。月は落ちない。」

はじめの声は聞こえないくらい小さくなっているけど、聞こえる。

「見えているのに」

はじめは茂みの中から空に向けて、手を伸ばしている。

あたしは引力について思う。すべてはみんな、引かれ合うのだという。月は、落ちない。それは落ち続けているから、と思う。落ち続けて、周り続けていれば落ちない、と思う。

あたしは周り続けていないので、落ちる。ただ、落ちる。落ちるあたしの軌道は直線だ。あたしは硬い地に向けて直線を描く。

はじめは踊りを踊ることが出来た。踊る、といっても何かの様式に沿った洗練されたものではなく、ただのたうつように動くだけだった。でも、それが、出来た。はじめの体は歪な弧を描くことが出来た。あたしは体を動かすことが得意ではなかったの、はじめのその動きはあたしを震わせるのに充分だった。あたしは震えたのだった。目玉が震えてその奥に繋がっている紐が震えたのだった。その紐に繋がっている柔らかいものも震えてその柔らかいものを覆う硬いものも震えてその硬いものを通じて、震えはあたしの全身に落ちた。

落ちて、潜る。

震えが。

だから、あたしは踊った。燃える本の前で。あたしはやがてはじめの遺した本を読み終えて、それを燃やす。ごみに出すのではなく、燃やす。自分の手で燃やす必要がある、と考える。あたしははじめを燃やさなくてはいけない。

だから、燃えて、はじめ。

そう考える。

灰が舞い上がって、あたしの頭の上に落ちる。あたしの振り回す腕の動きに合わせて、旋回している。時間が狂ってしまったようにゆっくりと、あたしと灰の間に何かが存在しているように、触れない。存在は、している。空気がある。あたしの腕が空気を搔いて、そして空気が灰を押す。あたしは踊る。目の裏側では、はじめが踊っている。かつてそうしていたように。だから、あたしは、そうする。跳ねて、浮く。着地する。

転ぶ。

痛い、と思う。手のひらをおかしなふうについて、筋が痛んだのだと思う。膝も擦りむいている。皮膚は裂けて、どこかで見たような果物に似た赤が覗く。どこで見たのだろう、と思うけどわからない。あたしは忘れっぽいから。記憶は全部、頭の中でぼんやりと、混ざる。土が、傷口に付着している。それを、はじめは舐めとる。血が流れている。それを、はじめの舌は舐めとる。面倒くさそうな表情をしている。ざらりときめの粗い舌だと思う。はじめは踊りだした途端に転んだあたしに駆け寄る。

はじめ？

違う。はじめはもう死んでいる。

違うよ。はじめはもう燃え尽きている。灰だ。灰が降る。時間が狂ってしまったように、ゆっくり

りとあたしの頭の上に落ちる。頭の上と、頬の上に落ちる。頬に触れる。雨だ。はじめが病院のベッドから消えたあの日も、雨が降っていた。本当に？あたしは忘れっぽい。忘れっぽくなっている。たくさん削られてしまった。病気のだから、仕方ない。虫がばら撒く病気だ。あたしは病気にかかって、削られて、死に掛けて、落ちている。

本が燃えて灰が降って転んで、あたしはそれからはじめのことを忘れる。少なくとも、そういうことにする。本も読まない。さよならは、爆発しない。あたしは学校を卒業して、入学して、そして卒業する。友人も出来て、恋人も出来る。しあわせだな、と男が言って、あたしも同じことを言う。思う。三人目の男だ。とても柔らかい太ももをしている。あたしたちは既にそれぞれ仕事に就いており、一緒に住んでいて、家族になろうと考えている。でも出来ない。あたしは病気にかかる。人から人への感染はない。でも、あたしは削られて、痩せこけて、薄白い病院服に包まれる。葉くさいシートに包まれる。その病棟には、あたしと同じ病気の人間が大勢いる。みんな削られて、死に掛けている。男はなんの心配もないような顔をして、大丈夫、と言う。別にそれは嘘ではない。ただの言葉だ。欲望だ。男はそうであればいい、と夢を見る。

あたしは、見ない。

あたしを、読む。まだ女の子の形をしていたあたしが書いた小説だ。つまらない小説。まだ引きちぎられずに、実家の片隅に残っていた。日に焼けてすっかり黄色くなっている。持ってきたのは男だ。あたしの部屋を片付けた母親から渡され、それをあたしに見せる。つまらないね、と笑いながら。でも、君が書いたものだ、と笑いながら。でも、だから、とても、いとおいしい、と笑いながら。男の笑い顔は、雲の隙間に覗く夜空のようだ。夜だ。あたしはそれを、夜に思い出す。鳥が鳴いていた。黒い鳥だ。男はあたしに笑顔を与えようとしていた。笑うことによって免疫力が向上する、という話を信じていた。もしくは、すがっていた。病気は、治らなかった。治療法はなく、ただ延命だけが抗う術だった。

星が落ちる、とあたしは記す。感傷が過ぎる、不恰好な小説だ。星に手を伸ばす少女が描かれる。少女は、自分が重力の中心でないことを嘆く。すべてのものが引き寄せられ、自らに落ちないことを嘆く。引き合うのでは不十分に思う。頭上の星が、足元の星が、自らに落ちればいいのに。そう欲望する。それはまるではじめのようだし、あたしのようである、とあたしははじめのことを思い出す。

はじめだ。

あたしは思わず声に出す。こんなところにいた。燃え尽きてしまったはずなのに。もう忘れてしまったはずなのに。こんなみっともない形状をした小説の中に、いた。病室だ。あたしは病室で紙の束をめくる。突然声を上げるので、同室の女性が驚く。どうしたの？と声をかける。うん、とあたしは言う。なんでもない。あたしの声は枯れてしまっている。枯れてしまっていて、もう戻らないと言われている。よく唇を注視しなければ聞き取れない。母親がそう言っていた。だから、同室の女性にはあたしの言葉は届かないだろう。同室の女性は、もうだいぶ目が見えなくなっている。

「そう言えば」と同室の女性は言う。

「また、落ちたみたいだよ」「下の階のひと」

「黒い服を着た人が大勢いた」「虫みたいに集まって」

「目？」「見えないよ」「ぜんぜん」

「でも、白いものと黒いものはよく見えるんだ」

「なぜだか」「それだけは」

「ねえ、なんでみんな落ちちゃうのかな」「ただ削られていって、死を待つように生きるのがこわいのかな」「生きてる意味なんか無い、って思っちゃうのかな」

「笑っちゃうね」

「あたしはもうずっとこわい」

「こんなところにいても、いなくても」

「こわい」

同室の女性は一人であたしが返事をせずともしゃべり続けた。いつものことだ。病棟では時折、飛び降りる人が出ていた。みんな、絶望をしているのだ。海を隔てた外国では一部機関が治療法を開発した、という話もある。貧しくて仕方がないあたしたちの国には、夢に等しい話だ。でも、その夢は見えてしまう。見てしまう。だから、絶望してしまう。同室の女性はそのことについて話しているのだった。あたしは、何も応えない。つまらない話だし、あたしが何を言ったところで彼女には伝わらない。

「でも、つまらないものにだって存在する意味はあるんじゃない？」

ないよ。はじめ。

そんなもの一つもない。だからあたしにも、それはない。

あたしはただ、落ちるだけだ。直線を描いて。硬い地面に。

はじめに。

はじめは星みたいだ。だから、あたしは手を伸ばす。落ちてくればいいのか。そう思う。欲望する。でも、落ちるのはあたしだ。落ちているのはあたしだ。

心臓がある。

からだ。あたしの。痩せた。枯れた。左の胸。見たことはないけれど、それはきっと赤いのだろうと思う。内側だ。あたしの身体は削られてやせ細っているけど、心臓は遅く蠢いているのだと思う。そこから管が伸びていて、その管は身体の内側まで伸びている。そこから吐き出された体液が管を通して、あたしを巡る。開いたり縮んだりしながら。それはだいたい一定のテンポで、行われて、それが、あたしの、生きる、になる。

あたしはあたしの心臓を見たことがない。内側は見たことがない。男は、ある。内側。あたしの股座を開いて、覗き込む。舌を這わす。ざらりとしている。傷口ではない。だから男はそれを押し拵げ、舌を這わす。

心臓が、あった。

もう一つ。あたしの内側に。左胸ではないほうに。男とあたしの間に。しかし、もう、ない。削れてしまった。あたしの心臓はもう一つだ。はじめ、とあたしは名前をつけようとしていた。それは新しい始まりになるのだ。いい名前だ、と男も言った。でも始まる前に終わってしまった。心臓が一つになるとき、男は涙を流した。それは直、一つもなくなってしまうことを理解していたからだ、とあたしは考える。

あたしは、流さない。何故ならそれは、決まりきったことだからだ。動いたら、止まる。生まれ  
たら、死に絶える。止まって、死に絶えて、消える。なくなる。終わる。決まりきったことだ。  
疑いようもなく、いつかは誰も彼もが決まりきったように死に絶えて燃え尽きてしまうのなら、  
それが、いつか、ではなく、いま、であったとして、何の不思議がらうか。

あたしはそう思う。

だから、言う。

「ちがうよ」と、はじめが言う。

「それはちがうんだよ」と、言う。

「それは、決まりきったことじゃないんだよ」

「生まれて死んで、それで消えてしまっただけなのは、決まりきったことじゃないんだよ」

「続くんだ」

「言ってたでしょ？」

「こなつ？」

「星が」「月が」

「落ちているんだ」

「落ち続けているんだ」

「だから、落ちない」

「落ちて、周り続けているから」

「続けば、いい」

「続けるんだ」

あたしは、続ける。踊り、語り、記述し続ける。硬い地面へ直線を描きながら、直線を円く捻じ  
曲げる。道具は要らない。頭があれば充分だ。色々削られてしまっているし、忘れっぽいのだけ  
れど、充分だ。あたしは語り続け、記述し続けることが出来る。

落ち続けることが出来る。

はじめのことを思い出したあたしは話し続ける同室の女性を背にし、夜の廊下を歩く。流星群、  
と病棟のスタッフが話していたのを思い出す。病棟は高いビルディングになっているので、傍ら  
の窓からは夜の街を見下ろせる。街の上空にはふわふわと白いものが浮いていた。月だ。月が出  
ている。あたしたちに病気をもたらした虫たちがその白い光を反射している。儂げな光は夜の空  
に滲むようにして溶けている。

あたしたちは、山に向かった。はじめの家の裏手にある山だった。夏休み、あたしたちは退屈し  
ていた。虫の音が木々と土の間に響き、あたしの体は染み出る体液に覆われている。それは夕方  
と夜の境目で、黄色い光は赤くなり、木々の吐く湿気が身に纏わりつくようで重い。

「ねえ、聞こえるよ」とはじめは言う。

「そらが、ごうごうと」

あたしはそう言われて初めて気づいた。空が、鳴っている。

星を見に来ている。流星群、と知らされている。あたしはあまり興味がなかったのだけれど、は  
じめは、興味を持つ。だから唐突に昼過ぎ、呼び出される。こういうの、すきななの？と聞くと、  
うん、と言う。好きなわけじゃないんだ。今まで見たこともないし。でも、今、見たい。そう

言う。

見たいんだ。

あたしたちは、中腹を目指した。そこに少しひらけた見晴らしのよい場所があるので、そこで見よう、と言う。はじめは背負ったかばんにおばあちゃんから持たされた水筒とおにぎりを入れている。水筒は二つある。一つはお茶が入っていて、もう一つはスープが入っている。はじめはご飯を食べるときには必ず、スープを必要とする。おばあちゃんはいつも笑っていた。その日もあたしの顔を見て、何かが皺から抜け出てしまいそうな笑顔を、浮かべる。あたしは肩にかけたかばんに小さな酒の瓶を忍ばせている。父親の酒棚から持ち出したものだ。瓶がとてもかわいいし、太陽の光を煮詰めたみたいな色がとてもきれいだ。実際、それは太陽の光を煮詰めて作られている。父親がうっとりとした顔で語るのを思い出す。

目的の場所に着くころには、あたしたちの汗染みは大きく広がり尽くしている。だから、衣服を敷いたシートの上に投げ出す。あらわになった肌に湿った風が吹き付ける。あたしの汗は蒸発する。蒸発して、空気に混ざって、散る。すると、はじめの黄色い肌に赤い光が乗ったのが見えた。肌を覆う体液を覆うその光はまた、あたしの眼球も覆うのだと思う。

星は、そして、流れた。

あたしたちはシートの上にしゃがみこみ、おにぎりを食べ終え、スープを飲み終えている。そして、太陽の酒を舐めている。太陽は、沈んでしまっている。白い雲が夜の空に浮くのではなく、覆うようにして、向かって右側を。左側を、眺めている。舐めながら。あたしの表情筋は緩む。においが、する。はじめのおばあちゃんが調合した虫除けを辺りに撒いたからだ。おばあちゃんの虫除けは虫を殺しはしないけど、遠ざけるにおいを出す。それは、薄荷のにおいに似ている。薄荷は、母が好きだった。飴玉を、いつも舐めていた。

そして、流れる。

左側だ。ちらりと、瞬く。きらりと？ちかちかと？

ううん。ちらり、だ。あたしはそれがいいと思う。

流れて落ちる。それが見える。右上から左下に、小さな光の線が幾つも瞬く。

二秒だけだ。あたしとはじめは舐めながら、それを見上げる。

あたしが落ちている、その時間も同じくらいだろうか。

二秒？三秒？

でも、それはどうだっていい。

あたしは廊下を歩いている。裸足だから、ぺたぺたと、音がしている気がする。本当にしているのかもしれないけど、わからない。照明が照らす、それは円で、あたしには円が見える。廊下の質感が丸く切り取られる。その、円が幾つも連なって、あたしを導くようだ、と思う。その連なりはどこまでも続くようだ、と思う。導かれるよう、に。

あたしは。

それは続いている、から、踊り場に着く。頬に風を感じるから、非常階段、と思う。おどりは、と口に出す。それは踊る、場、だ。空が見える。光が見える。月が、虫、溶けている。浮いている。

違う。

あたしは、落ちている。

手は、広げていない。手を、広げていけばよかったのだと思う。あたしは腕と脇に汗をかいていて、それを不快に思っている。手を、広げていけば、そこに空気が触れたのに、と思う。体液が蒸発するのは、とても気持ちいい。

「終わっちゃった」と、はじめは言う。あたしたちは山にいて、服を脱いで、舐めている。星は、既に流れ終えている。

「見えたのに。もう、見えない」

ああ、そうだね。そうだね、はじめ。

生きるのは、二秒みたいだ。それは瞬くみたいで、落ちるみたいだ。あまりにもあっけなく消え去って、何も残らないね。

手を、広げている。湿った脇の下に空気をを感じる。

おどりは、と思う。踊る、場、だ。

風が白い服の隙間から入り込んでくる。翻って、いるから。あたしは手を振り回し、足を振り回しているから。あたしと、あたし。踊り場のあたしと、素っ裸のあたし。手を、広げている。汗が乾く。蒸発して、拡散する。薄荷のにおい、と思う。そうなら、いいのに、と思うけど、そうじゃない。たんぱく質だ。あたしは、乾燥した、たんぱく質のにおいがする。それはあまり心地のよいにおいではない。けど、虫除けのにおいと混ざればましになると思う。踊り場のあたしはそう思いながら、鼻の奥に薄荷を感じる。

そして、転ぶ。跳ねるように。踊りだした途端だ。

はじめの笑う声が聞こえる。踊りだした途端に転んだあたしにはじめは駆け寄る。はじめの笑い声は雨が降る前の雲に似ている気がする。背に、鉄の柵を感じる。一瞬だけ。二秒より、一秒より短い、瞬間、衣服越しに冷えた鉄を感じる。その感覚はすぐに忘れ去られる。忘れる。忘れろ。くるりと。あたしは胃が浮く感覚を覚える。それは、感覚ではなく、浮いている、と思う。背に感じた感覚を後頭部に感じる。それは、柵に衝突したのだと思う。あたしの身体はくるりと時計の針のように。

まわり、ながら。

時計の針、と思う。言う。はじめがあたしの手を取って、ぐるぐるまわしながら起こす。あたしの足はもつれそうになりながら、でも、なんとか転ばない。もう、転ばない。はじめの笑う声が聞こえる。はじめの指があたしの指に絡んでいる。汗ばんでいる、細い指。関節が太い指。二番目の男に少し、似ている、と思う。二番目の男はあたしに乱暴に触って、あたしはそれを嫌だと思っている。はじめの指は乱暴じゃない。はじめの指は触っていないみたいにあたしの指に絡んでいる。はじめの指は力を込めないみたいにあたしの指を引き、まわす。笑う。

まわる。

まわって柵に衝突したあたしは、足場を失っている。だから、それは、終わらない。続く。あたしの中から重力に逆らわない。それは自然なことなのだと感じる。それまでが不自然だったのだと感じる。それまで感じていた足場による安定の儚さを思う。あたしたちを形作る足場の不完全さを思う。落ちる、だ。あたしたちは本来、落下するように出来ているのだ。あたしたちは

本来、落下すべく出来ているのだ。だから、落ちろ、と思う。みんな、落ちろ、と思う。

落ちろ。

落ちろ。

落ちろ。

みんなの足場は消える。崩れる。壊れる。どれでもいい。なくなる。例えば男の寝ている布団が消えて、畳がなくなる。床がなくなる。男は沈むように落下する。眠りからは覚めないかもしれない。男は一度眠ると中々起きないから。例えば同室の女性が包まれるシーツが消えて、ベッドがなくなる。病室の床がなくなる。同室の女性は滑るように落下する。落下しながらもしゃべり続けているかもしれない。眠りながらしゃべり続けているような女性だから。そして病棟の全てのベッドがなくなって床も抜ける。入院している患者も勤務者も落ちる。みんな落ちる。向かいのビルディングの床が全てなくなる。夜遅くまで勤勉に働く労働者がみんな落ちる。道路も消える。走りながらハンドルを握りながら、落ちる。落ちながら前進することは出来ないで、タイヤが空転している。舞台も消える。華麗に歌い踊るアイドルも猛々しく吠えるロックバンドも落ちて、こぶしを振り上げる観客も落ちる。一緒に落ちてる、と喜ぶ観客もいるけど落ちる速度は同じだから距離が縮まるわけじゃない。光り輝くマンションの床も消える。もう眠りについて子供たちも酒を手で語り合う大人たちも落ちる。ホテルも抜ける。まぐわう男女たちが落ちる。まぐわう男女たちはそれに夢中で落ちていることに気づかないかもしれない。アスファルトもなくなる。道行く人々は次の一步を踏みだすことなく落ちる。みんながみんな、まっすぐに落ちる。はじまった夜の中で、夜のように底のない黒の中へ。無数の線が見える。煌くように。流星群、と思う。

星が落ちる。

二秒、と思う。

そう、夢を見る。欲望する。

落ちる先には、はじめが埋まっている。はじめのおばあちゃんが埋まっている。あたしの父親が埋まっている。あたしの心臓が埋まっている。だれかが埋まっている。だれかのおばあちゃんが埋まっていて、だれかの父親が埋まっている。そこにあるのは死だ、と言う。でも本当は違う。落ちる先に死があるのではなく、落ちた後に止まるから死ぬ。

だから、あたしたちは死に至らない。

落ちて、落ち続けるから。

語り続けるから。

だから、これは、終わらない。

終わらせない。